様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０７５７

研究課題名（和文）「共和制の帝国」としてのソ連体制の成立

研究課題名（英文）The Formation of the Soviet Regime as an Empire of Republics

研究代表者
池田　嘉郎（Ikeda, Yoshiro）

東京大学・人文社会系研究科・准教授

研究者番号：８０４４９４２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,800,000円、（間接経費）　840,000円

研究成果の概要（和文）：研究の最終年度である平成25年度は、4年間の研究成果をまとめ、池田嘉郎編『第一次世界大戦と帝国の遺産』（山川出版社）として2014年3月に刊行した。同論集は池田ほか９人の執筆者が参加しているが、その中で池田は「序論　第一次世界大戦をより深く理解するために」および「コーポラティヴな専制から共和制の帝国ソ連へ」を執筆した。前者においては「共和制の帝国」ソ連成立の背景となった、第一次世界大戦による国際関係の変化、ならびに総力戦による各国の体制の変化について論じた。後者では、４年間の研究成果のエッセンスをまとめた。

研究成果の概要（英文）：During 2013, the last year of this research project, I have edited a collection of articles dedicated to the problem of the legacy of empires after the First World War. The volume is titled "The First World War and the Legacy of Empires", published by Yamakawashuppansya in March, 2013, with the participation of 9 authors. I have contributed to the volume by two articles: "To understand the First World War more deeply" (this is the first chapter of the volume by the editor) and "From a Corporative Autocracy to an Empire of Republics". The first of them is about the background, against which the Soviet Union as an empire of republics had emerged at the beginning of the 20th century, while the second -- about the formative process of the Empire of Republics. Thus, the volume as a whole, and the second article particularly, is the condensed version of the results of the research project.  Besides, the results of the whole project is planned to be published as a monograph by 2015.

研究分野：西洋史

科研費の分科・細目：ヨーロッパ史・アメリカ史

キーワード：ロシア　ソ連　ロシア史　帝国　第一次世界大戦　社会主義　ナショナリズム　民族問題

１．研究開始当初の背景

近現代ロシア史研究は長らく 1917 年の革命をもってその前後に分断されており、帝政期とソ連期との研究者の学問的交流は乏しかった。そのような状況を背景にして、帝国という概念を足掛かりにすることにより、上述の分断状況を克服し、近現代ロシア史を長期的に把握するような研究を行なうことが求められていた。

他方、民族問題に関する研究は帝政ロシアとソ連とを問わず盛んになされていたが、そこにも不十分な点が見られた。それは、民族関係は連邦制であれ自治であれ「国制」の領域においてまずは政治の場に表現されるのであるが、その国制に対する関心が研究者の間では低かったということである。したがって、帝国／ソ連中央の統治者またエリートであれ、周縁部の地元エリートであれ、彼らの構想をまずはいかなる国制においてそれが論じられているのかという観点から明らかにすることが求められていた。

２．研究の目的

１．に述べたことからも明らかな通り、帝政期とソ連期とを通時的に理解しうるようなあらたな枠組みを構築することが、本研究の最大の目的であった。帝国という概念を足掛かりにする一方で、ソ連という形式上共和制を採用している国家にその概念を単純にあてはめることは不可能であることも当初から明らかであった。そこで、ソ連は帝政期から帝国的特質（多民族性。統治に対する被治者の合意の不在）を引き継ぎつつ、共和制という要素を新たに取り入れた、「共和制の帝国」だったのではないかという仮説を立て、その実証を行なうことを目的とした。

ここで共和制に着目したのは、やはり１において示した国制に対して関心を向けることの必要性にもよっているのである。そもそも革命後のロシアが共和制を採択したことの歴史的背景、およびその歴史的意味については、従来の研究においては然るべき注意が向けられていなかった。申請者はすでに池田嘉郎『革命ロシアの共和国とネイション』（山川出版社、2007 年）においてこの点について論じていた。だが、そこではロシア帝国／ソ連の多民族的編成については中心的な分析対象とはしていなかった。そのため、今回の研究計画においては前著の成果を踏まえつつ、ソ連の民族関係や中央・地方関係においては共和制という国制はいかなる形式を帯びることになったのかを明らかにすることを重要な目的とした。

３．研究の方法

帝政末期から第一次世界大戦とロシア革命を経てソ連初期（1920 年代）、さらにスターリン時代におけるソ連体制の確立という一連の時系列の中で、それぞれの時期ごとの帝国編成の特徴を明らかにした。とくに帝政末期においては身分、地域、エトノスといった諸単位が混在する多元的な統合がなされていたのに対して、ソ連初期においては基本的にエトノスの統合は共和国、自治共和国、およびこれらの延長線上にある自治州という一元的な単位において行なわれていた。それでもソ連初期においては民族意識の近い将来の消滅を目指して、まさにその理由のために民族意識の育成がソ連中枢によって精力的に行なわれたが、スターリン時代に入ると状況は変化した。社会主義建設が基本的に完了したとの認識のもと、ソ連の現状は全て聖化され、民族および民族意識もまた長期的に残るものであるとされたのである。

史料としては、公刊史料では第一次世界大戦開始の少し前に刊行が開始された雑誌『民族と地域』、1915 年に刊行された『民族問題』が重要な史料となった。立憲民主党の機関紙『レーチ』をはじめとする定期刊行物も活用した。くわえてアーカイヴ史料も用いた。とりわけロシア連邦国家アーカイヴが所蔵する内務人民委員部の文書を活用した。

４．研究成果

「共和制の帝国」ソ連という視座が実証分析に耐えることを明らかにした。とりわけ帝国という要素と共和制という要素が結合する際の契機として、第一次世界大戦における総力戦の経験があったという認識を得ることができた。総力戦の経験は、ロシア帝国においては以下のような形で作用した。西欧諸国（これは同時に海洋植民帝国の本国でもある）において 20 世紀初頭までにネイション・ビルディングが進捗していたのに比べて、大陸帝国であるロシアでは民族その他の多元的性格が強いため、ネイション・ビルディングの進捗は相対的に遅れていた。ところが 1914 年に第一次世界大戦が始まると、ロシアも西欧先進諸国と同様の、総力戦という課題に直面せざるを得なくなった。そのため、全帝国を含み込む形の公民的ネイションであれ、個々の民族集団を基盤にしたエスニック・ネイションであれ、それらのものが相対的に未成熟の状態であるにもかかわらず、動員能力を高めるために帝政政府はネイション概念を援用し、住民一人一人の政治的主体意識を高めることを求めた。その結果、帝政期のロシアにおいて、近代的ネイションであるよりはむしろ身分にあたる諸々のエトノス集団が、そのままネイションという位置づけを与えられることになった。だが、ネイションの自立を支えるエリート（いわゆるブルジョア）の形成は未発達であったし、帝国中枢と地元政治家のいずれの側にも帝国全体の地域的一体性を破壊する企図はなかった。それゆえ多民族的広域圏を維持しつつ、かつそのそれぞれの構成要素（エトノス）が萌芽的なネイション意識をもちつつそうした広域圏の構成要素となるという、複合的な状態が生じたのである。

この過程において、独特の役割を果たしたのが「自治」という制度・概念であった。この制度・概念に着目できたのは、国制という観点を申請者が重視していた結果である。自治とは、第一次大戦開始までの時点の世界において、「民族自決」を満たすための有用なゴールであると考えられていた。独立には満たない妥協形態としてではなく、それ自体として追求するに値するものであると考えられていたのである（帝国の崩壊という展望はほとんど誰ももっていなかったため）。この自治という枠組は、ヨーロッパ諸帝国の角逐において伝統的に使われていたものであるが、19 世紀後半からは王朝原理による自治（王朝が自治を賦与する）とともに、ナショナリズムへの譲歩としての自治という発想も登場しつつあった。第一次大戦は諸帝国を揺るがすことにより、また個々の民族エリートのナショナリズムをそれまでよりも発展させることにより、自治を通じたネイションの自決という戦略をより現実的なものとすることになった。現実には多くの多民族帝国は第一次大戦によって崩壊し、解体するが、ロシア帝国だけはソ連邦というあらたな帝国的広域圏へと復活を遂げた。この帝国の再生過程において、自治は大きな役割を果たすことになった。元来、前近代的な帝国的・王朝的原理に由来する自治という枠組が、近代的なナショナリズムや共和政と結合され、「自治共和国」という独自の政体がソ連において生み出されることになったのである。自治共和国は帝国的広域圏の維持と、各地域のナショナリズムへの譲歩という二つの要素から成り立ったハイブリッドなのである。

くわえて、ソ連初期とスターリン時代とでの個々の民族（およびそのナショナリズムの発現）に対する政権の対応の違いについても明確に比較することができた。前者においてなお民族意識は近い将来の消滅が想定されていたのに対して、後者においては民族意識の相対的な堅固性が強調された。個々の民族集団に対する弾圧にもかかわらず、スターリン時代に民族意識がむしろ堅固なものとして理解されるようになるのは、社会主義建設が基本的に完了したとの認識によって現状が全て聖化されたことにもよるが、それとともに、以下のような背景があることも明らかにした。つまり、日常生活の社会主義的改造をより全面的に展開しようとすれば、それだけ住民の生活に密着した言葉や習慣や経済活動を介在する必要が高まり、その結果、地方官僚や中央志向のエリートによるロシア語の世界とは別に、各地域の日常生活の要素、「民族的」な要素がそれまでよりもいっそう重視される結果になったのである。

以上のような認識に基づいて、論文・編著の形で一連の研究成果を発表することができた。重要なものについて具体的に述べると、「帝国、国民国家、そして共和制の帝国」では本研究の基本概念について近現代ヨーロッパ史および世界史の中で明確にすることができた。海洋帝国と大陸帝国の対比、帝国原理と国民原理の相互浸潤といった基本的な分析枠組を打ち出し、さらには「共和制の帝国」ソ連成立の基本的な過程についても整理することができた。中華民国および中華人民共和国との比較についても、基本的な論点を提示することができた。

「ソヴィエト帝国論の新しい地平」は、テリー・マーチンとフランシーヌ・ハーシュによるソ連論を紹介するとともに、両者の議論がそれぞれにおいてもつ問題点を明らかにした。その上で、「共和制の帝国」論によって新たな視座を打ち出すこととなった。

池田嘉郎編『第一次世界大戦と帝国の遺産』（山川出版社）は池田ほか 9 人の執筆者が参加しているが、その中で池田は「序論 第一次世界大戦をより深く理解するために」および「コーポラティヴな専制から共和制の帝国ソ連へ」を執筆した。前者においては「共和制の帝国」ソ連成立の背景となった、第一次世界大戦による国際関係の変化、ならびに総力戦のもとでの各国の体制の変化について論じた。後者では、４年間の研究成果のエッセンスをまとめた。

研究成果全体の単著という形での発表も、今後行なわれる予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①<u>池田嘉郎</u>「『社会運動史』覚書き」『史苑』74-1 号、2014 年 1 月、59-72 頁

②<u>池田嘉郎</u>「ロシア史研究の中の戦後歴史学 ：和田春樹と田中陽兒の仕事を中心に」『史潮』73 号、2013 年 7 月、39-59 頁

③<u>池田嘉郎</u>「ソヴィエト帝国論の新しい地平」『歴史と地理』661 号、2013 年 2 月、1-12 頁

④<u>池田嘉郎</u>「帝国、国民国家、そして共和制の帝国」『クァドランテ』14 号、2012 年 3 月、81-99 頁

〔学会発表〕（計４件）

①<u>Yoshiro IKEDA</u>, “Autonomous Regions in the Eurasian Borderlands as a Legacy of the First World War, “ An International Workshop “Rethinking the First World War and Europe on its Centenary,” January 10, 2014, The University of Tokyo, Tokyo, Japan

②<u>Yoshiro IKEDA</u>, “Putting Together an Imperial Jigsaw Puzzle: How the Russian Empire was Envisaged in the Health Resort

Boom during the First World War," The Fifth East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies (ICCEES Asian Congress), August 10, 2013, Osaka University of Economics and Law, Osaka, Japan

③Yoshiro IKEDA, "Toward an Empire of Republics: Transformation of Russia in the Age of Total War, Revolution, and Nationalism," The Sixth International Symposium of Comparative Research on Major Regional Powers in Eurasia, January 20, 2012, The Slavic Research Center, Sapporo, Japan

④池田嘉郎「小シンポジウム『第一次世界大戦と帝国の遺産』趣旨説明」、および「『共和制の帝国』の誕生：第一次世界大戦とロシア革命」、日本西洋史学会第 61 回大会小シンポジウムⅡ「第一次世界大戦と帝国の遺産」(組織者池田嘉郎)、2011 年 5 月 15 日、日本大学

〔図書〕（計３件）
①池田嘉郎編『第一次世界大戦と帝国の遺産』(山川出版社、2014 年)、296 頁

②池田嘉郎「敗北後のジノヴィエフ――『ヴェ・イ・レーニン』構想メモ」、中嶋毅編『新史料で読むロシア史』(山川出版社、2013 年)、128-145 頁

③池田嘉郎「第一次世界大戦、ロシア革命、ネップ」、ロシア史研究会編『ロシア史研究案内』(彩流社、2013 年)、113-124 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
池田　嘉郎（IKEDA, Yoshiro）
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号:80449420

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：